

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』 —断りの表現を中心に—

藤巻和代

Intercultural misunderstanding between Japanese and Chinese learners of Japanese :with focus on “declining”

Kazuyo Fujimaki

In this paper, I set up “Intercultural Noise” and analyze the mis-communication between Japanese and Chinese learners of Japanese. I assume that while Japanese belong to a High-context culture (Hall,1993), Chinese belong to a Low-context culture: this leads to different interpretations between Japanese and Chinese, which causes Chinese speaker’s overlooking signs of “declining” when speaking Japanese. According to this assumption, I have researched the difference in interpreting such expressions as ‘iidesu’, ‘chotto’, and others by questionnaires. The outcome shows that they almost adjusted to Japanese communication patterns, but there are, in fact, still some misunderstanding. Therefore, I propose they need to be aware of other cultural patterns by cultural training in the process of learning Japanese.

【キー・ワード】 誤解、中国語話者／日本語学習者、文化的ノイズ、断りの表現

0. はじめに

本稿では、日本人と日本語習得過程にある中国語話者*1との言語コミュニケーション*2における「誤解」という現象に焦点を当て、文化的な視点から、その分析を試みる。日本人の用いるコミュニケーション・パターンの一つの特徴として、石井(1987)の指摘するように、察しを基盤とした遠慮・察し型のコミュニケーション・パターンを挙げることができる。つまり、日本人は、コミュニケーションにおいて言語メッセージだけではなく、コンテクスト(状況)それ自体に多くの情報を委ね、メッセージの受信者がその情報を察することができるように仕向けるという

言語科学研究第2号(1996年)

方法を用いることが多い*³。一方で、中国語話者の用いるコミュニケーション方法は、より言語メッセージに依存した形で成り立っているものと考えられる。そこで、両者の間に、言語表現の方法、あるいは場面に対する解釈にギャップが生まれ、その為に「誤解」が生じ易くなるのではないだろうか。

本稿では、これらの仮説をホールの提唱する「コンテキスト度」という概念を用いて、日本文化を「高コンテキスト文化」、中国語話者の属する文化圏を「低コンテキスト文化」と位置付け、中国語話者の日本語による誤解の原因を、文化的なノイズによるものと考えた。そこで、中国語話者が曖昧であると感じる表現を集め、それに対する日本語話者及び中国語話者の解釈の違いをアンケート調査によって、明らかにした*⁴。ここでは、調査の結果のうち、「断り」に関する表現についてのみ取り上げることにする。この調査の結果からは、「断り」の表現に対しては、筆者が予想していたよりもはるかに、中国語話者が日本的コミュニケーション・ルールを習得していたということ、また、特殊な状況下において「断り」を示す表現については、中国語話者よりはむしろ日本人の方が、これらの表現を「断り」の表現として捉えない傾向にあるという二つの事実が判明した。

以下、1章では、中国語話者と日本人の誤解のメカニズムに関する仮説を立て、2章で中国語話者と日本人における誤解の先行研究を取り上げる。また、3章以下において今回の調査に関する詳しい報告を行うことにする。

1. 誤解のメカニズム

人間のコミュニケーションには、そのコミュニケーションを成立させる為のある種のルールが存在していると考えられる。会話を成り立たせる為の「会話のルール」である。会話のルールの一つには、メッセージの伝達を成立させる為の「伝達に関するルール」というものが考えられる。伝達のルールというのは、前提として我々の中で共有されている、メッセージの伝達を行う際に用いられるルールのことである。これらのルールの多くは、普遍的なものではなく、文化的に規定されている場合が多い。例えば、メッセージの情報量に関するルールがその一つとして挙げられる。情報量に関するルールというのは、他者に送るメッセージの内容を言語メッセージにどのくらい盛り込むかということである。

言うまでもなく、我々は、言語メッセージとそれを取り巻くコンテキスト（非言

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』

語メッセージも含む) によってメッセージの情報を交換し合い、コミュニケーションを成立させている。我々の間を行き交うメッセージの情報を言語的にどの程度明示するかというのは、文化によって異なってくる*⁵。伝達のルールに関するこうした相違は、異なった文化を背景にする人々の間で行われるコミュニケーション (= 異文化コミュニケーション) の成立を妨げる要因にもなる。ここでは、これを「伝達に関するノイズ」 (= 「文化的ノイズ」) と呼ぶことにする*⁶。

伝達のルールは、各文化成員のコミュニケーション・パターンにも反映する。文化的に規定された伝達のルールへの違反によって起こる「伝達に関するノイズ」は、表面化しにくく、コミュニケーションの参加者にも意識されにくいものである。そこで、メッセージの曲解や誤解をコミュニケーションの参加者双方に引き起こし易く、異文化コミュニケーションにおける誤解の原因の一つとなる。

中国語話者と日本人における誤解の原因についても同様のことが言える。先にも述べたように、多くの日本人の用いるコミュニケーション・パターンというのは、「察し」を最大限活用した遠慮・察し型のコミュニケーションである。言語それ自体に託す情報量は多くなく、むしろ、コンテクスト重視の、場面依存型コミュニケーション・パターンを用いる。ここでホールの行った分類法*⁷に従って分析すると、日本人は「高コンテクスト文化」に属しているということが出来る。また、いくつかの先行研究*⁸を基に、中国語話者を「低コンテクスト文化」に属するものと仮定する。以下、ホッファー (1994) を基に、中国語話者と日本人とのコミュニケーションにおける「誤解」の仮説をまとめると、

1. 中国語は日本語に比べて低コンテクスト言語なのではないか。
2. 中国語話者は日本語の使用においても、低コンテクスト文化のパターンを用いてコミュニケーションを行っているのではないか。
3. 誤解はこれらの文化的に規定された伝達のルールの存在に気付いていないことから起こるのではないか。つまり、「文化的ノイズ」の存在を設定することができるのではないか。

ということになる。以下、中国語話者と日本人の摩擦に関する先行研究として、彭 (1990a) を簡単に取り上げ、調査の報告に移る。

言語科学研究第2号(1996年)

2. 先行研究

中国語話者と日本人との言葉による摩擦を扱っているものとしては、彭 (1990a) を挙げることができる*9。彭は、中国語と日本語の特徴を明らかにするために、中国人が戸惑う日本語の表現について、日本人・中国人双方を対象に事例収集調査を行い、それを各事例別にまとめている。それらの事例の分析を通して、彭は摩擦の原因として以下の3つを挙げている。

- (1) (i) 母語に対応する言葉がないことにより、その意味の深層を理解できない。
- (ii) 漢字という共通媒体があるために、中国と日本で意味が異なる同一の漢字であるものを、母語の干渉によって正しい（意味の）理解が妨げられてしまう。
- (iii) 社会文化的な基準の相違によって誤解が引き起こされる。

この彭の挙げた摩擦の原因は、藤巻 (1995) で挙げた「言語使用における言語的ノイズ」にほぼ相当するものと思われる。特に、上記の (iii) を藤巻 (1995) では、コミュニケーション時に表面化しないノイズとして、「伝達に関するノイズ」（文化的に規定された伝達に関するルールからの違反によって起こるノイズ）としている。また、彭は上記に挙げた原因の他に、中国人が日本語を理解するのを難しくしているものとして、日本人社会の中にある「一定の共通理解」、「内部の約束事」という文化的なルールの存在を挙げており、「誤解とは文化的に規定された会話のルールに違反するために起こるもの」という筆者の仮説を支持するものだと考えられる。

では実際に、中国語話者にとって、どのようなルールが日本語におけるコミュニケーションを難しいものになっているのであろうか。以下、インタビューの結果*10を基に、中国語話者が戸惑う日本語の表現についてまとめる。

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』

3. 中国語話者が戸惑う日本語の表現

ここではインタビューで明らかになった表現のうち、「断り」に関する表現のみを取り上げる。中国語話者から挙げられた曖昧な断りの表現としては、以下の5つを挙げることができる。

- (2) (a) いいです
- (b) ～が／～けど
- (c) ちょっと・・・
- (d) 考えておきます
- (e) あとで連絡します

上記の表現のうち(a)～(c)の表現は、以下の4章における調査報告を見ても分かることであるが、広く日本人の間に「断り」の表現方法として浸透している表現だと考えられ、先の彭の研究でも、中国人に理解しにくい曖昧な日本語表現として取り上げられている。しかしながら、言葉それ自体には「断り」の意味はなく、言語の使用場面において「断り」の機能を果たすものだと考えられる。また、(d)の表現は、いくつかの文献^{*11}に見られるように、日本的な断り方の代表例としてよく取り上げられる表現で、これも言葉自体には断りの意味はなく、むしろ文字通りの意味で捉えれば積極的な意味にも取れるものである。更に(e)の表現になると、ほとんど意味的には肯定的なものとなる。つまり、(2)の表現に共通して言えることは、いずれも表現としては否定的な意味はなく、コミュニケーション上否定的な機能を持つ「断りのサイン」^{*12}であるということである。

断りの場面においてどういう言語表現を用い、どのような方法を採用かというのは、文化によって異なる。イエス・ノーをはっきりさせた方が相手に対して誠実な場合もあるし、反対に、はっきりさせずに婉曲的な言い方をして断った方が相手に対して失礼がないという考え方もある。日本を例に採れば、婉曲的な言い方が好まれるのは多くの研究^{*13}が示す通りであろう。しかしながらここで問題なのは、このような断りの場面で日本人が婉曲的な断りのサインとして用いる表現が、異文化コミュニケーションの場でも機能するとは限らないということである。実際中国語

言語科学研究第2号(1996年)

話者へのインタビューでは、これらの表現のコミュニケーションにおける機能的な意味を知らなかったために、生じた誤解による失敗や摩擦の事例がいくつも学習者から挙げられた。高コンテクスト文化に属する日本人は、言外のメッセージを相手が理解することを望む傾向にある。しかしながら、中国語話者は言語的に明示されたメッセージの内容（意味）をそのまま受け取ってしまう傾向にあるため、両者の間にメッセージの解釈に対するギャップが生じ、誤解の原因となるわけである。上記に挙げた断りの表現は、言語的に「断り」のメッセージを明示してはいないが、日本語話者の共有している伝達に関する知識の枠内では断りの機能を持っていると考えられる。そして、これらの表現が中国語話者から挙げられたということは、中国語話者が低コンテクスト文化に帰属しているという仮説をある程度実証したことになる*14。

そこで、筆者は中国語話者を低コンテクスト文化に属しているという仮説に基づいて、これらの表現から生じた誤解の原因を、日本語のコミュニケーションにおける「断りのサイン」の見落とししによるものと仮定した。また、「いいです」という表現に関しては、断りのサインの見落としというよりは、中国語（母語）の運用規則の転用による誤用ではないかと仮定した。以下、4章ではこの二つの仮説に基づき、これらの表現に対する日本人及び中国語話者の解釈の差異をアンケート調査の結果から見ていく。

4. 「断り」の表現に関する調査の報告

4-1. 調査の概要

この調査では、中国語話者と日本人の「断り」の表現に対する解釈の違いを見ることで、中国語話者と日本人の会話に対する前提や期待の違いを明らかにすることを目的とした。調査の対象は、東京近郊の日本語学校及びボランティア団体に所属する中国・台湾出身の中国語話者（いずれも中級レベル程度の日本語学習者）60名、及び日本人（東京近郊の学生、教員及び一般の人）75名である。調査期間は、1994年の10月～11月の二ヶ月間で、調査方法はアンケート票による記述方式を採用した。

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』

4-2. 結果及び考察

先の3で挙げた5つの表現に対する日本人及び中国語話者の解釈の結果については、以下の(3)(4)に示す通りである。(*: %は小数点第2位を切り捨てているため、全体が100%にならないものもある。)

(3) 断りの表現に対する解釈 ① (中国語話者と日本人の比較)

表 現	解 釈	中国語話者	日本人
(スーパーで) 店員: 袋はいいですか 客: <u>いいです</u>	(a) ほしいです	27.6%	2.7%
	(b) いりません	55.2%	96.0%
	(c) いい袋です	10.3%	0.0%
	(d) はい (イエスの意味)	5.2%	1.3%
	(e) その他	1.7%	0.0%
	無効回答	2名	
A: (火曜) にいっしょに、映画を見ませんか B: <u>火曜日でもいいけど、次の日曜日はどうですか</u>	(a) 他の日がいい/火曜日は都合が悪い	70.0%	49.3%
	(b) 火曜日は都合がいい/大丈夫	18.3%	15.1%
	(c) その他	11.7%	35.6%
	無効回答		2名
A: ええと、火曜日に しましよう B: <u>火曜日はちよつと…</u>	(a) 少しなら大丈夫/少し時間がある	3.4%	2.7%
	(b) 都合が悪い	86.4%	90.5%
	(c) 少し考えたい	5.1%	6.8%
	(d) その他	5.1%	0.0%
	無効回答	1名	1名

言語科学研究第2号(1996年)

(4) 断りの表現に対する解釈② —アルバイトの場面—

状況設定：中国人留学生がアルバイトを探している場面

表 現	解 釈	日本人
お店の人: じゃあ、 <u>考えて</u> <u>おきましょう</u>	(a) ダメな可能性は高いが、「とりあえず検討はしてみる」という意味	50.7%
	(b) いい返事を期待して欲しい	1.4%
	(c) よく検討した後に連絡する	16.4%
	(d) 丁寧な断りの表現/「断り」を表している	31.5%
	(e) その他	0.0%
	無効回答	2名
お店の人: <u>後で連絡します</u>	(a) 文字通り検討してから、連絡する	70.8%
	(b) 断りにくいので、とりあえず言った。つまり断る意味で連絡はしない	6.9%
	(c) 断りにくいので、とりあえず言った。後で連絡してみる	19.4%
	(d) たぶん大丈夫 (O.K.) だという意味	2.8%
	(e) その他	0.0%
	無効回答	3名

表 現	解 釈	中国語話者
お店の人: じゃあ、 <u>考えて</u> <u>おきましょう</u>	(a) 連絡はくるが、いい返事かどうかは分からない	29.3%
	(b) 「O.K. (大丈夫だ)」という返事がくる	1.7%
	(c) ダメだという返事がくる	8.6%
	(d) これは断っているので返事はこない	56.9%
	(e) その他	3.4%
	無効回答	3名
お店の人: <u>後で連絡します</u>	(a) 連絡がくる	63.8%
	(b) 連絡はこない	36.7%

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』

(3)は中国語話者・日本人共に、与えられた設定の中でこの表現の意味は何かという趣旨の質問をし、選択肢を選んでもらったものである。また、(4)においては、同じ状況設定の中で、日本人には自分だったらどういう意味で使うか、中国語話者には自分がどういう意味で受け取るか、質問紙を変えて、それぞれ答えてもらった。質問内容を変えた理由としては、(4)の表現はいつでもアルバイトの交渉場面で用いられる表現として中国語話者から出されたものであり、魚住(1994)の研究や野元(1987)の指摘にも見られるように、これらの表現が「断り」の表現として一般的には機能していないのではないかと考えたからである。そこで使われる場面を限定し、日本人及び中国語話者の解釈の差異を見ることにしたのである。

これらのアンケート調査の結果からは、「いいです」「ちょっと」という断りの表現に関しては、日本人の9割方が否定的な意味、つまり「断り」を示す表現として理解していることが分かる。このことは、これらの表現が「断り」の意味を暗示的に表すということを多くの日本人が認識しており、会話のルールの一つとして日本人に共有されているということを示している。また、「いいけど、・・・」という表現については日本人より、中国語話者の方が否定的な意味として積極的に捉えている傾向があることが見て取れる。この表現に関する日本人側の(c)その他のコメントの)回答を見ると、「火曜日を否定しているわけではないが、他の日を暗示している」というコメントが多く、単に自分の都合が悪いことを伝えているのではなく、相手に譲歩的な態度を示しながら、この表現を用いることで暗示的に自分の意向を示すという、日本人の遠慮・察し型のコミュニケーション・パターンを見出すことができる。つまり、「都合が悪いわけではないが、他の日(日曜日)の方が都合がいいので、その日にしたい」ということを、「いいけど、・・・」という表現によって表しているのである。同様のコメントはその他を選んだ中国語話者にも見られ、彼らが日本語のコミュニケーション・パターンに精通していることが窺われる。

次に、限定された状況下での断りの表現として取り上げた「考えておきます(ましょう)」「後で連絡します」という表現については、半数以上の日本人が文字通りに、反対に中国語話者は断りの表現として解釈する傾向があるということが分かった。特に「後で連絡します」という表現については、「連絡はこない」と回答した中国語話者の多くが「これは日本人の曖昧な断り方/丁寧な断り方」とコメン

言語科学研究第2号(1996年)

トしていることから、これらの結果は彼らの経験を物語っているものと推察することができる。反対に、多くの日本人が特にこの表現を断りの意味では解釈していないということから、一般には「文字通りの意味」で使われている表現であると言えるだろう。しかし、「考えておきます(ましょう)」に関しては、上記の結果からも分かるように、日本人も必ずしも積極的な意味では捉えていないと言える。

以上の結果をまとめると、1. 日本人がここに挙げた表現を一般に「断り」のサインとして理解していること、つまり、はっきりした断りの言葉ではなく、暗黙のうちに了解された「断りのサイン」として意識していること、2. 中国語話者が予想していたよりも、日本的なコミュニケーション・パターンに適応していること、3. 「考えておきます(ましょう)」や「後で連絡します」という表現は、アルバイトなどの特殊な状況下でのみ、断りの機能を持つと考えられ、一般に多くの日本人はこれを「断り」の表現として認識していないということが分かった。また、「いいです」に関しては、「欲しいです」と解釈する者が中国語話者の中に30%近くいたことから、中国語話者にかなりの程度まで共通して見られる誤用表現ではないかと考えられる*¹⁵。今回の調査では、当初仮定していたような典型的な誤用のパターンを中国語話者から引き出すことはできなかったが、回答者の中には予想通りに回答している者もあり、若干ではあるが日本人より「断りの表現」を肯定の意味で捉える者が多かったことから、これらの表現が中国語話者と日本人との間に誤解を引き起こす可能性も十分に考えられる。

5. 結び

本稿では、異文化コミュニケーションにおける誤解の要因を文化的なノイズによるものと考え、中国語話者と日本人の誤解について考察してきた。文化的なノイズは、文化によって会話のルールがそれぞれ異なっていることから生じると考えられ、ここでは会話のルールの中でも、メッセージの伝達に関するルールの存在を設定した。また、言語的メッセージにどれだけの情報を明示するかというメッセージに関する情報量のルールに注目し、ホールの分類を基に、日本人の属する文化を「高コンテクスト文化」、中国語話者の属する文化を「低コンテクスト文化」と位置付けた。つまり、中国語話者と日本人との誤解は、コンテクスト重視型か言語

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』

メッセージ重視型かという、言語メッセージ及びコンテキストの解釈に対する違いから生じるものと考えたのである。そこで、中国語話者が曖昧とする日本語の表現をインタビューによって集め、それらの表現についてのコミュニケーション場面での日本人及び中国語話者の解釈の違いを見るために、双方を対象にアンケート調査を行った。結果は、中国語話者が、当初の予想に反して、おおむね日本的コミュニケーションに適応していること、また、特殊な状況下における「断り」の表現については、逆に日本人の方が「断り」の意味で解釈しない傾向にあることを示すものとなった。しかしながら、「断り」の意味解釈において、中国語話者と日本人との回答には若干のズレが見られ、中国語話者の中には、予想通りの回答をする学習者もいたことから、今後も引き続き調査を行っていく必要性を感じた*¹⁶。また、インタビューでは、これらのコミュニケーション・パターンの違いからくる解釈のズレをまだ把握していない学習者もあり、教師は文法知識の蓄積だけでなく、異文化への気付きを高めていくための訓練を、意識的に施していく必要性があると感じた。その一つの方法としては、カルチュラル・アシミレーターを用いた学習法を挙げることができるだろう*¹⁷。

最後に、今回の調査では、誤解の原因として、文化的に規定された伝達のルールの違いから起こる「文化的ノイズ」というものを設定したが、誤解の要因には、文化的な違いだけでなく、「言語獲得過程には目標言語に対する言語的・文化的無知から、学習者がメッセージに対して低コンテキスト的な解釈をしがちである」という、学習者の「低コンテキスト化」の問題もあり、この現象も合わせて今後の課題として扱っていきたい。

【追記】

本稿は、藤巻(1995)「言語獲得における中国語話者の『誤解』の研究」の一部を、新たにまとめ直したものである。本稿をまとめるに当たって御指導くださった久米先生、論文指導に尽力してくださった徳永先生、執筆に当たって貴重な御助言をくださった神田外語大学の諸先生方及び学友に対し、深い感謝の意を表したい。また、調査に当たって協力していただいた日本語学校及びボランティア団体の教職員並びに学生の皆様方に心からの御礼を申し上げる。最後に公私ともに惜しみない協力を注いでくれた夫に感謝を述べる。

言語科学研究第2号(1996年)

<注>

1. ここでは、藤巻 (1995) に従って、中国語を母語とする日本語学習者を広く「中国語話者」という分類で括っている。
2. 本稿では、コミュニケーションを次のように定義し、言語コミュニケーションについてのみ扱うことにする。
コミュニケーションとは、「自己と他者との間で何らかの影響を相互に及ぼし合う過程」である。
3. このようなコミュニケーション特性を持つ文化をホール (1993) は、「高コンテクスト文化」と名付けている。
4. この調査に関する詳しい調査結果は、藤巻 (1995) を参照してほしい。
5. ホール (1993) は、コミュニケーションにおけるコンテクストの認識度によって、文化を「高コンテクスト文化」と「低コンテクスト文化」に分類している。
6. ノイズとは、コミュニケーションを阻害する要因すべてのことを指すが、ここでは、特に異文化コミュニケーションにおけるノイズとして、「伝達に関するノイズ」というものと設定する。これは言い換えれば、「文化的ノイズ」ということになる。
7. 注5に同じ。
8. 彭 (1990a)、孔健 (1992)、梅田 (1993)、『留学生新聞』など、中国語話者に関するものを参考とした。
9. 中国語話者と日本人との言葉に関する誤解を扱っている研究としては、他に、近藤／他 (1992)、文化庁 (1994) などが挙げられる。しかしこれらの研究では、中国語話者は外国人の一部として扱われているのみである。
10. この調査は、1994年6月から7月にかけて行われたものである。インタビューへ協力者はアンケートも含め、全部で38名、その内訳は、台湾出身が5名、大陸出身が33名であった。インタビューに関する詳しい結果に関しては、藤巻 (1995) の4.2.を参照してほしい。
11. 彭 (1990a)、近藤／他 (1992)、文化庁 (1994)、魚住 (1994) などを参照してほしい。
12. ここでは断りの意を表明する言語的サインのことを指す。
13. 水谷 (1979)、岩田／水田 (1990)、彭 (1994) など多くの研究がある。
14. インタビューの中で日本人についての感想を聞くと、肯定否定を問わず、中国・台湾人に比べて日本人は曖昧だとする意見が多く、また、中国語話者を対象に行われた『留学生新聞』(アジア・パシフィック・コミュニケーションズ)でも同様の意見が載せられていることから、多くの中国語話者が日本人の言語行動を曖昧に感じていることが分かる。
15. 特に、これらの誤用は初級後期から中級に移るくらいの学習者に多く見られるようである。筆者はこれを中国語の“好”“可以”などの表現(いずれも中国語で「いい」の意味がある)の運用方法からくる誤用ではないかと考えている。例えば、中国語では、“好吗”(いいですか)という問いに対しては“好”(いいです)などと答える。また、日本語でも「良いですか。」という意味できかれたら「良いです」と答えるため、要るかどうか

中国語話者と日本人の日本語による『誤解』

かという意味で使われている場合でも肯定の意味で「いいです」と答えてしまうのではないだろうか。

16. 今回ここでは取り上げなかったが、誘いの表現における解釈の違いについても同様のことが言える。
17. 藤巻 (1995) では、学習者の異文化理解（日本文化の理解）を促進するための方法として、カルチュラル・アシミレーターを用いた学習法を提示している。

<参考文献>

アジアパシフィックコミュニケーションズ (1994) 留学生新聞 4月1日号

- 石井 敏 (1987) 「対人関係と異文化コミュニケーション」
『異文化コミュニケーション』有斐閣、pp.122-140.
- 今尾ゆき子 (1994) 「条件表現各論—ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ」
—談話語用論からの考察—『日本語学』、Vol.13、明治書院
- 岩田 祐子/水田 園子 (1990) 「異文化間コミュニケーションの教育と訓練」
『日本人の異文化コミュニケーション』北樹出版、pp.145-180.
- 魚住 友子 (1994) 「あいまいな『断り』の発話と理解—『考えておきます』をめぐって」、
『南山日本語教育』創刊号、南山大学大学院 外国語学研究科日本語教育専攻
- 梅田 星也 (1993) 『日本語先生奮闘記』—中国で思う外国語教育のあり方— 大修館書店
- 近藤 祐一/横田 雅弘他 (1992) 『外国人留学生とコミュニケーション・ハンドブック』、
アルク出版
- 孔 健 (1992) 『中国人からみた日本人』—島国根性と武士道と町人と— 学生社
- ネウストプニー (1981) 「外国人とは何か」、『言語生活』、Vol.1-6.
- 野元 菊雄 (1978) 『日本人と日本語』筑摩書房、pp.3-84.
(1987) 「世界の中の日本語」『日本語と外国人』文化庁、pp.57-67.
- ハウエル、ウィリアム.S/久米昭元 (1992) 『感性のコミュニケーション』—対人融和のダイ
ミズムを探る— 大修館書店
- 文化庁 (1994) 『異文化理解のための日本語教育Q&A』
- 細川 英雄 (1994) 『実践日本事情入門』 大修館書店
- ホッファー、B. L. (1994) 「ことばと文化」—人々から生まれて人々をつなぐ
(橋本弘子訳)、『異文化理解とコミュニケーション』、
Vol. 1、三修社、pp.6-28.
- 彭 飛 (1990a) 「中国人留学生を対象とした日本語教育に関する調査報告」 pp.161-195.
(1990b) 「『ちょっと』からみた日本人の言語習慣をめぐって」
—「単純的修飾」と「場面的添加」—、pp.1-74.
前記の2本の論文は以下の書に収録してある。

言語科学研究第2号(1996年)

- 『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』 和泉書院
(1994) 『ちょっとはちょっと…』
—ポン・フェイ博士の日本語の不思議— 講談社
- ホール、エドワード T. (1993) 『文化を越えて』 (岩田慶治／谷泰訳)
TBSブリタニカ
- 平井 一弘 (1994) 「コミュニケーションのしくみとはたらき」
『異文化理解とコミュニケーション』、Vol.1, 三修社、 pp.29-50.
- 藤巻 和代 (1995) 「言語獲得における中国語話者の『誤解』の研究」
神田外語大学大学院修士論文
- 水谷 修 (1979) 『話しことばと日本人』 創拓社
- 宮原 哲 (1992) 『入門コミュニケーション論』 松柏社、 pp.11-25.
- Klopf, Donald W. & Ishii, Satoshi (1989) *Communicating Person-to-Person.*
Kiriharashoten. Tokyo.
- Grice, H. P. (1975) *Logic and Conversation.* University of California,
Berkeley.